

平成23年 第4回

東京都教育委員会定例会会議録

日 時：平成23年3月10日（木）午前9時30分

場 所：教育委員会室

平成23年3月10日

東京都教育委員会第4回定例会

〈議 題〉

1 議 案

第23号議案 東京都公立小学校、中学校及び中等教育学校前期課程の学級
編制基準の一部改正について

第24号議案 平成23年度東京都公立学校長及び副校長の人事異動につい
て

第25号議案から 東京都公立学校教員等の懲戒処分等について

第30号議案まで

第31号議案 東京都教育委員会委員の辞職の同意について

2 報 告 事 項

(1) 平成22年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果について

(2) 東京都公立学校教員等の懲戒処分等について

委員 長	木 村 孟
委 員	内 館 牧 子
委 員	高 坂 節 三
委 員	竹 花 豊
委 員	瀬 古 利 彦
委 員	大 原 正 行

事務局（説明員）	教育長（再掲）	大 原 正 行
	次長	松 田 芳 和
	理事	岩 佐 哲 男
	総務部長	庄 司 貞 夫
	都立学校教育部長	直 原 裕
	地域教育支援部長	松 山 英 幸
	指導部長	高 野 敬 三
	人事部長	岡 崎 義 隆
	福利厚生部長	谷 島 明 彦
	教育政策担当部長	中 島 毅
	特別支援教育推進担当部長	前 田 哲
	人事企画担当部長	高 畑 崇 久
（書 記）	総務部教育政策課長	黒 田 浩 利

開 会 ・ 点 呼 ・ 取 材 ・ 傍 聴

【委員長】 ただいまから、平成23年第4回定例会を開会いたします。

取材・傍聴関係でございます。報道関係は、産経新聞1社、個人は、1名から取材・傍聴の申込みがございました。許可してもよろしゅうございますか。——〈異議なし〉——では、許可いたします。入室していただいでください。

会 議 録 署 名 人

【委員長】 本日の会議録署名人は、高坂委員にお願いいたします。

前々回の会議録

【委員長】 1月27日開催の前々回第2回定例会会議録につきましては、先日本配りして御覧いただいたと存じますので、よろしければ御承認を賜りたいと存じますが、よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——それでは、第2回定例会の会議録については御承認いただきました。

前回2月10日開催の第3回定例会会議録を机上に配付しておりますので、次回までに御覧いただき、次回の定例会で御承認を賜りたいと存じます。

非公開の決定でございます。本日の教育委員会の議題等のうち、第24号議案から第30号議案まで及び報告事項（2）につきましては、人事等に関する案件ですので非公開にしたいと存じますが、よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——では、そのように取り扱わせていただきます。

委員長職務代理の指定

【委員長】 次に、委員長職務代理の指定についてでございます。地方教育行政の組織及び運営に関する法律第12条第4項の規定により、「委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、あらかじめ教育委員会の指定する委員がその職を行う。」と規定されております。委員長職務代理者につきましては、2名おりますが、内館委員の委員長職務代理としての任期が平成23年3月22日までとなっておりますので、引き続き、平成23年3月23日から平成24年3月22日までの1年間、委員長職務代理第一順位としてお願いをしたいと存じますが、よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——それでは、皆様の御了解をいただいたということで、引き続き内館委員、よろしくお願ひいたします。

議 案

第23号議案 東京都公立小学校、中学校及び中等教育学校前期課程の学級編制基準の一部改正について

【委員長】 第23号議案、東京都公立小学校、中学校及び中等教育学校前期課程の学級編制基準の一部改正について、説明を、地域教育支援部長、お願いします。

【地域教育支援部長】 第23号議案、東京都公立小学校、中学校及び中等教育学校前期課程の学級編制基準の一部改正について御説明いたします。

平成23年度の学級編制基準ですが、都においては、平成22年度から小1問題・中1ギャップの予防・解決のための教員加配を行っており、平成23年度はその2年目となります。一方、国においては、平成23年度に小学校1年生を35人学級とする予算案及び関連法案が国会に提出され、予算案は2月末に衆議院を通過し、年度内に成立する見込みですが、関連法案、つまり公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律、いわゆる義務標準法の改正案は、現在、衆議院で審議中で、報道によると、年度内の成立が危ぶまれている状況です。

そのような中、各小・中学校においては、平成23年4月1日現在の学級数を確定し、担任の人選等を決定するタイムリミットに来ております。このことから、都教育委員会として、既定の方針である小1問題・中1ギャップの加配を踏まえた学級編制基準をまず確定し、各学校に4月への準備を進めてもらい、国の35人学級の法案が通りましたら、改めて対応するという2段階方式で進めさせていただきたいという内容です。

資料1枚目の中央の表を御覧ください。

平成22年度は、小1は39人、中1は39人の加配算定基準を設けておりますが、平成23年度は、それをそれぞれ1名ずつ減らし、小1は38人、中1は38人といたします。小2については、今年の小1が持ち上がりますので39人となります。平成24年度は、更にそれを1名ずつ減らしていくという3年間の計画となっております。平成22年度は128名の教員定数を用意しましたが、平成23年度は276名を定数として用意しております。

なお、国の35人学級が実施される場合、この他に239名の教員が必要になると見込んでおります。

「2 改正内容」は、今申し上げた数字を文章化したものです。

なお、国の義務標準法改正が行われた場合の学級編制基準の改正については、改めて教育委員会に議案として提出したいと考えております。その後、改めて教員を各小・中学校に配置をすることになります。

説明は以上です。

【委員長】 ただいまの説明に対して、何か御質問、御意見はございますか。国の方の対応が遅れておりますので、東京都が先行していくということですが、よろしゅうございますか。

【竹花委員】 事務分掌ですが、これは地域教育支援部の所掌なのですか。

【地域教育支援部長】 学級編制基準については地域教育支援部で行っております。

【竹花委員】 人事部ではないのですか。

【地域教育支援部長】 地域教育支援部でまず学級数を確定して、その結果を人事

部に送ります。人事部が定数と人員を用意して学校に送るという事務の流れになっております。

【竹花委員】 分かりました。

【委員長】 よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——それでは、本件については原案のとおり御承認いただいたということにさせていただきます。

報 告

(1) 平成22年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果について

【委員長】 報告事項(1)平成22年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果について、説明を、指導部長、お願いします。

【指導部長】 報告事項(1)平成22年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果について御説明します。

お手元に御用意したオレンジ色の冊子についても、後程説明をしたいと思います。

平成22年10月26日に実施した東京都独自の学力調査の調査結果がまとまりましたので、御説明します。

「1 調査内容等」の(1)調査内容は、具体的に四つの項目で行いました。

①の「基礎的・基本的な事項に関する調査」は、経年的に行っている調査ですが、「確実に身に付けておかなければ、後の学年等の学習内容に影響を及ぼす基礎的・基本的な事項」を出題し、学習の素地として確実に身に付けさせておく必要がある資質・能力の定着状況を調査するものです。

②の「読み解く力に関する調査」は、平成22年度新たに実施した調査ですが、文章や図表等から必要な情報を正確に取り出すという、情報を的確に取り出す力。そして、比較関連付けて読み取るということで、複数の情報を比較関連付けて読み取る力。さらに、その意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決することのできる力、この3つの観点から定着状況について見たものです。

③の「児童・生徒質問紙調査」は、都の独自の学力調査において従来から行ってい

るもので、児童・生徒の意識や生活状況と学力の定着状況との関連を調査するものです。

④の「学校質問紙調査」は、各学校における指導方法に関する取組と学力の定着状況との関連を調査するもので、国が全国学力・学習状況調査を抽出に切り換えたために、都として新たに実施したものです。

「（２）調査の対象学年及び実施学校数、対象児童・生徒数」は、基本的には抽出調査で行いました。

①の「基礎的・基本的な事項に関する調査」の表を御覧ください。対象学年は小学校第４学年と中学校第１学年です。抽出でこの基礎・基本の学力調査をスタートしましたが、参加を希望する学校が年々増えており、希望校についても参加を認めております。平成22年度小学校第４学年における基礎・基本の調査では、抽出校200校に対し希望校が475校もあり、合計で675校、児童数は45,494名に及びました。

中学校第１学年については、学校数は抽出が102校、希望校の250校を加えて合計352校、生徒数は40,262名でした。右側には、参考として昨年度の実施校数等を紹介しております。

②の「読み解く力に関する調査」は、全数調査、いわゆる^{しつ}悉皆調査で行いました。対象学年は、小学校第５学年と中学校第２学年です。学校数は小学校1,309校、中学校629校です。児童・生徒数は小学校91,375名、中学校71,069名です。

「（３）調査方法及び調査教科・内容」は、資料の表に示しているとおりです。

「（４）実施日」は、平成22年10月26日です。

資料２ページを御覧ください。

２ページ及び３ページは、「基礎的・基本的な事項に関する調査」結果の概要を示しております。

「（１）『基礎的・基本的な事項に関する調査』平均正答率」は、小学校４年及び中学校１年のそれぞれの教科について、都全体の平均正答率を示しております。年度によって、問題の内容等によって若干の変動はございますが、おおむね基礎的・基本的な事項は定着しています。しかしながら、毎年御報告を申し上げますが、活用する力をより一層育んでいく必要があります。こうしたことから、後程御説明申し

上げる読み解く力の調査を行いました。

(2) では、具体的な基礎・基本に関する調査の問題例を、小学校、中学校からそれぞれ1題ずつ示しております。

①は、漢字の読み書きです。特に注目すべきは、グラフの左側の小学校4年で、平均正答率が67.6パーセントと特に低かった「放送」、これは書きの問題で記述です。普段、学校で放送という言葉は耳にしているものの、書くということになると、小学校4年生にはなかなか難しかったのかという感じがしております。具体的に因果関係があるかは分かりませんが、小学校における様々な委員会活動は5年生から開始されることもあり、4年生には、学校生活では耳慣れていても、書くことはなかなか慣れていなかったのが原因ではないかと考えております。

ちなみに、「放送」という漢字については、読みの問題として平成20年度の基礎・基本に関する調査で出題しておりますが、そのときの平均正答率は98.3パーセントでした。

続きまして、中学校1年生の漢字の読み書きですが、特に上から2番目の「戸外」は、記述式で出した問題です。これは何と読みますかということで「こがい」が正解ですが、平均正答率が20.4パーセントでした。誤答の多くが「とがい」となっていました。これは、やはり中学生は戸棚（とだな）や江戸（えど）など、「戸」を「と」や「ど」と読むように日常的に使っており、「こ」という読み方はなかなか浸透しておらず、戸籍（こせき）などといった読み方が余り使われていないためではないかと考えております。

併せて、平均正答率が低かった「展開」、これは書きの問題ですが、「展」が特に多く間違っており、平均正答率は33.5パーセントでした。「展」の中に、「表」と同じ、右から左下にはらいを入れてしまう誤答が非常に多く目立ちました。

さらに、成績の「績」の字も、面積の「積」の字を当てる誤答が多かったと調査結果に出ております。

②も同じく国語で、主語と述語の関係、修飾語と被修飾語の関係です。これは経年比較のため毎回出題しておりますが、なかなか定着していない状況です。特に小学校の問題で、「兄は、父が買ってくれたランドセルを大切に使っている。『兄は、』と

ありますが、兄はどうしているのですか。」ということで、これは書かせる問題でしたが、「使っている」が正解で、平均正答率は54.7パーセントでした。誤答の多くは「大切に」で27.8パーセントでした。

中学校の問題では、特に修飾語と被修飾語の関係を聞いていますが、「心をこめて ていねいに 手紙を 書く。」この「ていねいに」が修飾するのはどれですかという選択の問題ですが、「書く」が正答で、平均正答率が40.7パーセントでした。誤答の多くは、「手紙を」で、43.2パーセントでした。これについては、様々な分析が必要ですが、名詞を修飾する連体修飾語よりも動詞を修飾する連用修飾語に課題が多く見られるのではないかと分析しております。

③は、「文と文との関係を正確に読み取り、適切に判断する。」問題です。四角の中にある文章の第三段は非常に短い文でまとめられておりますが、第四段が非常に長く、一文になっています。この第四段を、「第三段に対する反論」、「筆者の意見の理由」、「筆者の意見」の三つに分ける問題でした。②と④とで分けるのが正答で、52.5パーセントでした。一番下に平成21年度平均正答率47.0パーセントと出ておりますが、昨年と同種類の問題より若干平均正答率は上がっております。これは、3つに分けるポイントを、「第三段に対する反論」、「筆者の意見の理由」、「筆者の意見」の三つに分けて考えてみようという具体的な指示をしたところ、正答率が若干高まったという状況です。

資料3 ページを御覧ください。

(3) は、「算数・数学科」の問題例とその結果についてです。

①は、「基にする量と比べられる量の関係を理解する。」という問題です。「青いリボンと赤いリボンがあります。青いリボンの長さは21cmです。これは赤いリボンの長さの3倍に当たります。赤いリボンの長さは何cmですか。式を書きましょう。」という小学校の問題で、正答はアの $21 \div 3$ で、正答率が56.4パーセントでした。ちなみに昨年の問題も資料に示しておりますが、昨年の平均正答率は49.8パーセントでした。

今年度は、具体的に赤いリボン、青いリボンという形で図を示し、1倍、2倍、3倍と示してありましたので、ある程度ヒントになるようなところがあって、平均正答

率が高まったかと考えております。

いずれにしても、このような日常の指導を行っていくことが肝要であると私共は結論づけております。

中学校についても同種類の問題ですが、「右の図のような2本のテープがあります。赤いテープの長さは4cm、青いテープの長さは10cmです。赤いテープの長さは、青いテープの長さの何倍か答えなさい。」ということで、正答は $4 \div 10$ でアの0.4、正答率は32.6パーセントでした。誤答の多くは、 $10 \div 4$ でウの2.5を正解だと考えたものでした。このようなことから、基にする量と比べられる量の関係を理解し演算決定をさせる際には、どのような問題場面なのか、言葉だけではなくテープ図や線分図を用いて、基準量と比較量を具体的に考えさせて指導することが重要であることが分かりました。

②は中学校の例ですが、「ある針金の長さとお重さとの関係を表したものであり、重さは長さに比例しています。次の表のAにあてはまる数を答えなさい。」ということで、長さ3センチの針金の重さが24グラム、7センチでは何グラムでしょうという記述式の問題です。正答は56で、正答率が90.2パーセントでした。

この種類の問題も、平成21年度に、こういった表を示さずに、ただ文章題で出題した場合の平均正答率は84.1パーセントでした。日常の授業における指導で、このようなことを意図的に中学生あるいは小学生に行わせることが大切だと考えております。

③も中学校の例ですが、 $a - b$ の値が最も大きくなるようにするには、 a 、 b にそれぞれどのような数字を入れたらいいのかという問題です。正答は a に+7、 b に-5で、平均正答率は54.5パーセントでした。基礎・基本的な事項については、従来から比較的定着はしておりますが、応用する力に若干課題が見られるということです。

続きまして、4ページ及び5ページの、今回初めて実施した「読み解く力に関する調査」結果の概要について御説明します。

まず「(1)『読み解く力に関する調査』平均正答率」ですが、小学校5年生に、国語、社会、算数、理科で読み解く力に関する調査を行いました。平均正答率が、国語73.7パーセント、社会71.7パーセント、算数53.5パーセント、理科65.8パーセントでした。中学校2年生については5教科で行い、それぞれ国語から英語まで、表に示

しているような平均正答率でした。

なお、調査開始初年度ですので、過去との比較はできませんが、私どもが意図していた情報を正確に取り出す力、取り出した複数の情報をきちんと関連づけて読み取る力、それを活用して読み解く力、この3つの観点で平均正答率を見ますと、小学校5年生においては、取り出す力は81.1パーセント、読み取る力は60.1パーセント、解決する力は55.6パーセントの平均正答率でした。

情報を正確に取り出す力についてはおおむね良好ですが、読み取る力と解決する力については課題があることが分かりました。特に本日御紹介したいのは、(2)の小学校理科の読み解く力に関する調査の問題例とその結果についてです。問題が具体的にどのような構成になっているのかを御紹介します。

オレンジ色の冊子の177ページを御覧ください。

177ページから178ページまでにかけて、問題文と小問が記載されております。4人の児童が、校舎の周りのA地点、B地点、C地点、D地点の4か所の地面の温度を測るという場面設定の問題になっております。

報告資料にお戻りください。

問題1は、「必要な情報を取り出す力」を見るということで、「②のグラフで、午前8時から正午までに地面の温度は何度上がったでしょうか。」という温度の変化を正しく取り出す問題です。これは単純に②のグラフを見て、午前8時が31度、正午が39度で、その差が8度、これが正答になります。平均正答率は84.7パーセントと非常に高くなりました。

問題2は、「比較・関連付けて読み取る力」を見るということで、「①から④のグラフにおいて、午前8時から午前11時までの地面の温度の変化が同じグラフの組み合わせはどれですか。」という、それぞれの地面の温度の変化の様子を比較・関連付けて読み取る問題です。それぞれ午前8時から午前11時までのところに着目し、①は28度で一定、④も午前8時から午前11時まで28度で一定ですので、①と④が同じグラフの組合せとなります。また、②と③は、午前8時に31度で、午前11時には36度になっているので、同じ種類のグラフです。正答は①と④のグラフ、②と③のグラフということで、イトウになります。平均正答率は66.9パーセントでした。

問題3は、一番難しい「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」を見る問題です。「AからDの場所で調べた地面の温度の変化を表しているグラフは①から④のどのグラフでしょうか。」ということで、科学的な思考力も活用しなければならない問題です。特に④のグラフは、28度からずっと変化せずに、正午を過ぎて午後1時に29度ぐらいになっていて、他のグラフに比べて地面の温度が低いところである、したがって、④が北のAではないかという推論を立てていきます。さらに、①のグラフは、午前8時から午前11時まで温度は変化していません。午前11時から温度が上がり、午後3時にはピークを迎えて一定になっているということで、これは西であろうと推測できます。一番分かりやすいのは、太陽は東から昇りますので、温度が急激に上昇し、急激に下降するものが東であろうということで、②を東と読み取ります。③は南であろうと推論をしていって正答を導き出しますが、平均正答率は低く、45.8パーセントでした。

(3)は、「読み解く力に関する調査」(中学校国語)の問題例とその結果です。問題で与えられた文章はかなり長いので、資料では一部省略しておりますが、ササの一種であるネザサが子孫を生き延びさせるための巧妙な工夫について記述してあります。ネザサが持つ子孫を生き延びさせるための巧妙な工夫について記述している説明的な文章を読んで、①、②及び③の問題を解いていきます。①は必要な情報を取り出す力を見るということで、「『感心』の語句が含まれる形式段落は第何段ですか。」という問題です。第三段と第四段にありますので、正答はアとなります。

②は、「比較・関連付けて読み取る力」を見るということで、本文冒頭の重要な言葉である「感心したことがある」、その理由を読み取る問題です。選択式問題で、正答はイの「子孫を生き延びさせるための巧妙な工夫があったこと。」で、感心したこと理由になりますが、平均正答率は57.4パーセントでした。誤答として多かったのは、第一段落の冒頭を読み、次のものであろうということで、アと解答した生徒が34.1パーセントでした。

③は、「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」を見るということで、筆者の意図を解釈する問題です。選択式問題ですが、アが正答で、平均正答率は47.3パーセントでした。

このように、初めて実施した読み解く能力に関する調査ですが、今後も引き続き、情報を適切に取り出す力、読み取る力、読み解く力の3つの観点で各教科の問題を構成したいと考えております。

資料6 ページを御覧ください。

「4 児童・生徒質問紙調査」結果の概要」の(1)は、学習に関する意識調査の状況です。授業の内容が「分かる・どちらかといえば分かる」と回答した割合は、小学校5年生では、グラフに示したように右肩上がりになっております。私どもが行っている学力調査と調査結果報告書を基に学校が授業改善プランを作成し、徐々に改善してきたものと考えます。中学校2年生でも、授業の内容が「分かる・どちらかといえば分かる」と回答した割合は、右の図のように、平成22年度は理科のポイントが若干落ちていますが、他の教科については上がっております。数学は、「よく分かる・どちらかといえばよく分かる」という回答が68パーセント台で、昨年度の64パーセントから、かなり上がってきております。

(2)は、関連でクロス集計をしたものです。「分からないことや知りたいことを調べるために、情報を集めているか。」を児童・生徒に尋ねております。「している」と答えた児童の平均正答率は、小学校5年で71.9パーセント、「しない」と答えた児童の平均正答率が56.3パーセントで、その差は歴然としております。また、「複数の情報を比べ、それらの特徴を見付けているか。」については、「している」児童・生徒の平均正答率は、72.9パーセントと57.2パーセントで非常に高いですが、「しない」という児童・生徒の平均正答率は非常に低くなっています。

「5 『学校質問紙調査』結果の概要」ですが、学校の指導として、特に調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導を日頃から行っているか尋ねたのに対し、左側の棒グラフのように、「よく行った」と回答した学校は、小学校5年で28.1パーセント、中学校2年では23.5パーセントしかありませんでした。その辺が課題であろうと考えております。

「6 調査結果に基づく事業改善の視点」として、(1)から(4)まで示しております。特に(3)では、読み解く力を高める指導を充実する必要があるということ、(4)では、言語環境の整備が大切であるということに記載しております。

「7 東京都教育委員会の今後の方策」ですが、(1)として、本調査報告書を配布するとともに、説明会を実施してきちんと説明をまいります。

また、(2)として、「東京都学力向上施策検討委員会」を設置し、区市町村教育委員会の代表等と東京都教育委員会でお互いに学力調査の実施法方や内容等について意見を交換し、よりよい問題を作成していきたいと考えております。

最後に、1点御紹介いたします。今回、読み解く力に関する調査を悉皆^{しつ}で実施いたしましたので、オレンジ色の冊子に、読み解く力についての区市町村別平均正答率を掲載しております。154ページ及び155ページが小学校、156ページ及び157ページが中学校についてです。

説明は以上です。

【委員長】 ただいまの説明に対して、何か御質問、御意見はございますか。

【内館委員】 3ページのリボンの問題ですが、平成21年度は、こういう図がなくこの正答率だったということですね。図があることによって正答率が高くなったということは、かなりヒントを与えているようなもので、結局、今回はヒントというか図があったから正答率が高かったということで、簡単に喜んで良いのでしょうか。

【指導部長】 これについては、日頃から先生方がそういう指導をされた上で、児童が正答に到達するようにしなければいけないと考えておまして、一昨年に策定しました「東京ミニマム」では、そのようなものを示しております。ただ、何も示さないで出題した場合と、何か示して出題した場合の違いについて見てみたかったということで、平均正答率が高かったことをもって喜んではいられないというのは、御指摘のとおりです。

【内館委員】 違いを見たいというのでしたら非常によく分かるのですが、同じような状況ではからないと比べられないだろうと思いましたので質問しました。

【委員長】 図表がないこのような問題に対しては、先生は図表をつくることを教えればいいのです。それで点数が確実に上がります。

【竹花委員】 基礎的な学力については悉皆^{しつ}調査でないのはどうしてですか。

【指導部長】 基礎・基本の問題は、平成19年度から行っておりますが、つまり

の部分がどこにあるのかを捕捉したいということで調査実施をしたもので、併せてそのときは悉皆調査も行っておりました。したがって、全数調査ではなくていいという考え方の下に、基礎・基本に関する調査の平成18年、平成19年及び平成20年ぐらいのデータを分析して「東京ミニマム」を策定したという経緯はございます。

ちなみに、来年度はこの基礎・基本も悉皆にしていきたいということで、新学力調査においては、基礎・基本に関する調査と読み解く力に関する調査を併せて悉皆にしていく計画を立てております。

【竹花委員】 読み解く力はそれで良いとしても、基礎的・基本的な事項に関する調査は平均値をずっと見ていますが、平均値ではなくて「東京ミニマム」に照らして、もはや何かの手当てをしなければこの子はだめだという児童・生徒がどれぐらいいるのか、あるいは良くできる児童・生徒がどれぐらいいるのか、そういう部分を少し過去と比較しながら、今どういう傾向にあるのかということを考えてほしいと私が以前指摘しましたが、その分析はなされていますか。

【指導部長】 来年度は悉皆調査になりますので、全数調査の段階で傾向がよく見えてくるかと考えております。御指摘いただいた点については、今、中学校においては、自分のクラスの生徒のつまずきはどこにあるかということで、担任の先生方が、「東京ミニマム」を活用しながら伸ばす指導はされていますが、具体的な数値については、年1回の調査ですのでまだとっておりません。

【竹花委員】 これはできることなのです。いろいろ調査をするには目的がありますが、一つは、目的にも書いてありますが、後の学年等の学習内容に影響を及ぼすことがないようにしたいという思いを生かすには、どの児童・生徒がそうした基礎的な学力に到達していないのかが分かり、その児童・生徒に対して特別な指導をその後行うことで、初めてこの調査が生かせると考えますが、そのような発想には立てませんか。

【指導部長】 少し付け加えますと、この都独自の学力調査も、個人票を全て返却しております。つまり、自分の正答率が何パーセントであったか、国語、算数・数学でそれぞれの小問ごとに何パーセントであったかという個人票は返却し、担任の先生と本人と保護者で三者面談を行って、どこにつまずきがあったのか、どう改善してい

かなければいけないのかということについては、各学校の取組としても行っております。

ただ、そのような情報を、都教育委員会として62ある基礎的自治体から全部集めて、非常に学習についていけない生徒の指導をどのように行っているかについてまで、まだ詳^{つまび}らかにしてはおりません。御指摘を踏まえて、区市町村教育委員会の取組が今どうなっているのかをきちんと捕捉していかなければいけないと思います。

【竹花委員】 いろいろな議論の場でも出ていますが、平均値の人を相手に平均的なことを教えて、その結果をパーセントで出すという方法は、今の時代にふさわしくありません。そう一人一人については当たれませんが、個別の生徒の状況をよく見極めた上で、ある程度の層に向かって特別な取組をしていく必要があるというのは従来から言われていることで、調査をすれば良いというものではありません。中学校が本当にこの調査をどのように生かしているのかについては、ある程度把握しておかなければ、手数ばかり掛けて議論をしても、あまり意味がないということになりはしませんか。同じような調査をしている区市町村も結構あるんでしょう。そういうものを含めて、どのように生かせるのかを少し知りたいと思います。

【指導部長】 今、御指摘いただきましたので、個人票が一人一人の児童・生徒に返っていきますから、それを基に、担任、あるいは学校や区市町村教育委員会がどのような取組をしているのか、少しつぶさに調べたいと思っております。

【竹花委員】 そのようにしていただいて、関心を持ってもらうことが大切だと思いますので、その点もよろしく願います。

それとともに、東京都教育委員会の全体的な調査で区市町村ごとの結果も出ましたが、少し手当しないと、このままでは学年を上がっていくことは難しいという児童・生徒の層がどのくらいいるのかということは分かりませんか。それが私は非常に心配なのです。指導部長の評価も、例えば、授業の内容が「分かる・どちらかといえば分かる」と回答した割合が少し伸びています、我々の努力の成果ですと言いますが、努力の成果でしょうか。英語の授業が分かる^と回答した生徒が66パーセントで、3人に一人は分からないという実態で良いのかという話です。少し上がってきていますから、成果が上がっていますという評価は違うのではないかと思います。少なくとも、

中学校2年生の英語の授業が、3人に二人は「分かる・どちらかといえば分かる」というのだから、他の選択肢は「分からない・どちらかといえば分からない」ということでしょう。それが3人に一人で良いのかという私の考えとともに、分からないと言っている3分の1に対してはどうするのだということをきちんと考え出して、しっかり行ってもらわないことには、こういう調査をする意味はないと思います。

【指導部長】 御指摘はごもっともです。確かに英語を見れば、64パーセントぐらいですので、決してこれで良いとは思っておりません。小学校も中学校も区市町村教育委員会も、何とか分かる授業というものを展開していきたいと思っております。そのために様々な取組を行っておりますので、そういった成果は年度ごとに見れば上がってきていると御紹介させていただきましたが、決してこれで良いとは思っておりません。

【竹花委員】 習熟度別授業を行っているところとそうでないところがあるでしょう。習熟度別をやっているところは、英語の授業が分かるという生徒が増えるのは当たり前だと思います。そういうのを少し見てみないといけないと思います。これだけで、ああ、そうですか、少し良くなっているのですか、と言っても仕方ありません。

【指導部長】 確かに御指摘のように、全国学力・学習状況調査を見ても、小学校の児童は、全国的には比較的学力が高いのですが、中学校は、この縦軸を御覧いただいて分かるように、60パーセントからスタートしていて、国語以外は60パーセントから70パーセントまでのところに全部来ております。これだけしか「分かる・どちらかといえば分かる」と答えていないという問題意識は、きちんと持っていかなければいけないと思っております。

【竹花委員】 国語の授業がわかるという率が高いのは、結果が分かりにくいからです。本人達が分かっていると思っただけなのです。数学や英語は答えが出るから、すぐ、ああ間違った、分かってないんだとなるのです。だから、国語と他の科目の差というのは必ずしも有意ではなくて、大方3人に一人は中学校2年生になったら、中身はよく分からないままで授業を受けているのが実態だということが分かる表だと見るべきです。そうだとすると、それをどうするのか。繰り返し言っています

が、習熟度別授業をもっと広げましょうよ。特に基本科目の数学と英語は次に進めないのですから。中学校3年生で調査すれば、「分かる・どちらかといえば分かる」はもっと低いと思います。そんなことを公立中学校では何十年も繰り返して良いのか、とこの調査をとらえないといけません。

【指導部長】 御指摘のとおりだと思います。まだまだ分かる授業というものが徹底していないということです。これについてはきちんと対応していかなければいけないと考えます。

【竹花委員】 それはよく分かりますが、今までのそういうやり方では、これを越えることは難しいと思います。これは平成16年度から行って、確かに何パーセントかは上がっているかもしれませんが、今までのやり方では、努力してもこの程度にしかならないのです。どこかでやり方を変えないとこれを変えられないということですから、何か考えますというのがこの教訓だと私は受けて止めていただきたいと思えます。そうしないと、この状況は変わりません。東京都の中学校が今のこのままの状態では、どうにもなりません。もっと公立中学校に行きたいという人を増やすためにも、この状態が続いてはいけなくて受け止めてほしいのです。正答率が少し上がったから良かったというのではいけないのではないかと私は思います。私は、かねてから公立中学校に対する信頼を取り戻したいと思っているのですが、この状態は信頼できる状態ではないと受け止めるべきだと思います。

【内館委員】 私、中学生の時に、授業が全然分からなかったんです。本当に分からなかったんです。その分からなさを感じている生徒たちが、多分この分からないという生徒達の間にもいると思うのですが、先生たちの予測がつかないくらい分からないんですよ。本当に分からないのです。そのときに私が思ったのは、あまり分からないと、もういいって投げ出してしまうのです。正と負の計算ができなくて、将来、大根を買うのに困らないし、足す、引くだけが分かれば良いと思ってしまいます。恐らく英語でも数学でも、皆どこかで投げ出してしまって、おれはだめ、私はだめという気持ちが、先生方がお考えになっているよりも、もしかしたら大きいかもしれません。それを少しずつあげると、急にやる気になったりするのです。だから、今、竹花委員がおっしゃったような、少し違うやり方でそういう部分を刺激する

ということも考えて、何かできないでしょうか。私も、もう少し刺激されていれば、数学ができたような気がしています。

【竹花委員】 本当にそこの考えを改めないと、状況は変わりません。私も3年間教育委員を務めていて、このようなことばかり毎年聞かされて、東京都教育委員会は何をしているのだと言われたら、私は答えられません。本当に是非ともよろしく願います。

【委員長】 竹花委員のおっしゃることは理解できますが、私は平均値は平均値として意味がないとは思いません。ただ、前からご意見が出ていますし、今、内館委員もおっしゃったが、成績の悪い子供たちがどのぐらいいるのか、特別な対応の必要のない児童・生徒がどのぐらいいるのか、これについては分析する必要があります。今は、昔はできなかった習熟度別学習が実施できるのですから、そういう手配を有効に使うためには、やはり成績分布を見るしかありません。習熟度別学習を行っているエンカレッジスクールが、非常に大きな成果を上げていることはご存知の通りです。勉強が分かるようになれば子供たちはついてきますから、そちらの方向へ舵を切っていく必要があるのではないかと思います。

【指導部長】 おっしゃるとおりだと思います。ちなみに、どのような状態が絶対だめな状態で、どのような状態はクリアしているのかというのは、数値的にここまでという判断は難しい部分がございます。ただ、例年、この報告書で分布は出しております。報告書の7ページ以降を御覧いただければと思いますが、小問ごとに平均正答率のグラフ、正答数の分布ということで、国語から全て出しております。我々もこれらを踏まえて、小問ごとにどこが悪かったのかについてはきちんと確認をし、区市町村教育委員会に対して説明はしております。

今の御議論は、一人一人の子供たちにきちんと手当をしていかなければならないというところですが、東京都教育委員会、区市町村教育委員会、学校及び教員との関係もございます。今、教員達は、モチベーションを高める教育、指導の工夫を相当研究している者が多いです。もちろん、習熟度学習を取り入れている学校もあります。様々な形で子供たちのやる気を引き出そうと取り組んでおりますが、竹花委員御指摘のとおり、まだ中学校はこの程度の状況です。これを良い状況として認識しては困る

というのはそのとおりでして、このような実態についてきちんと踏まえながら、今後新たに何かできないかということについては、今、御意見も賜ったところでございますので、少し考えていきたいと思えます。

【竹花委員】　まず、人ごとに分布をつくってみてください。問題ごとに分布をつくるのではなく、例えば、基礎的な問題で6～7割をとれなかった人がどれぐらいいるのか、平均点以下の子供たちのうち特に著しいものを幾つかに分けて、それはどのような人がいるかを、まずは一度見てみなくてははいけません。

【委員長】　そういう意味でも、私は学力調査というのは悉皆でなければだめだと信じています。今の竹花委員の議論を続けると、悉皆で調査して、その結果を全部学校に戻せば、その学校の先生方が、自分の学校にどのぐらいできる子供がいて、どのぐらい成績の振るわない子供がいるのかということ把握することができます。そうすると、先生方がその結果に応じて、習熟度別に教える方法であるとか、その他、竹花委員がおっしゃったようないろいろな方法を適用することができます。しかし、悉皆ではないと、自分が担任している子供たちがどの辺りの成績ランクにあるのか分かりません。国も舵を切り始めて、3年に一度ぐらいは悉皆を行うとっておりますので、良い方向に動き出したなと思っております。抽出では意味がありません。先生方も、どうせ抽出だからという雰囲気になっているようにも聞いています。

【竹花委員】　今日は一人しかいませんが、マスメディアの人達にも少し勉強していただいて、中学校2年生になって、3人に一人が授業が分からない、よく分からないというのは問題だと、きちんと記事に書いてください。そこの意識を皆で変えていかないとはいけません。だから少人数学級というものに意味が生じるのですし、習熟度別授業、あるいは補習授業をどうするのかといった方向に話がいかないと、一つも変わらないのではないかと私は思います。指導部長、よろしく願います。やはり発想を転換しなくてははいけません。

【委員長】　これは少しまぜ返しの議論になるかもしれませんが、ある調査の専門家に聞くと、小学生の質問紙に対する回答は信用できますが、中学校になるとあまり信用できないということも言っています。そういう意味で、実際の成績が重要ですから、私は悉皆にこだわるのです。よろしいですか。—— 〈異議なし〉 ——それで

は、本件については報告として承ったということにさせていただきます。

参 考 日 程

(1) 教育委員会定例会の開催

3月24日(木) 午前10時

教育委員会室

【委員長】 それでは、今後の日程について、教育政策課長、お願いします。

【教育政策課長】 今後の日程について御案内申し上げます。

教育委員会定例会でございますが、今回は3月24日木曜日、午前10時から、場所は教育委員会室を予定しております。

以上でございます。

日程以外の発言

【委員長】 それでは、竹花委員からどうぞ。

【竹花委員】 先日、卒業式で、進学指導推進校の都立北園高校に行ってきました。校長先生の熱い思いも聞きました。ずいぶんグローバルな取組をしていて、校長先生の意識は、生徒たちの行く大学の状況等を考えれば、生徒たちがグローバルな世界でいろいろ活動していくというところに一番大きな可能性があるのではないかとこのことを考えて、オーストラリアに2週間の学習に行かせているとのことでした。また、ドイツにも新たに、3人ですが行かせたり、いろいろな取組をしているという話を聞きました。オーストラリアにどれぐらい行っているのですかと聞いたら、320人ぐらいいる学年のうち30人か40人ぐらいとのことでした。誰がお金を出しているのかと聞いたら、本人が出しているそうです。他にも行きたい人がいるだろうと言ったら、いますが、お金がなくて行けないという生徒たちもいて、そういう生徒たちの中には、学校を支援してくれる地域の人や卒業生の基金のようなものがあって、貸し付けるといってそこから出していただくようにしているそうです。

前にも少し申し上げたことがあるかもしれませんが、このグローバル化している社会に学校教育がついていけるのかということは、やはり十分検討しなければいけない課題だと思います。これは中学校も高校も同じです。東京都教育委員会が、できるだけ高校の時代に、できるだけ多くの高校生に、海外で10日でも2週間でも過ごして、外からものを見てみる、どういう生活を外国の子供たちはしているかを知る、そういう機会をできたら全員に提供するということはとても大切だと思います。多くの府県でも、そのような取組が今進みつつあります。

既に来年度予算は決まっておりますが、再来年度の予算で画期的な予算を獲得して、このグローバルな世界で生きていく子供たちをどう育てるのかということについて、新たな施策を打ち出していければと思いますので、一度事務局でも、どういう方法があるのか検討していただだけませんか。これは資金面もそうですし、学校でその期間をどう扱うのか。例えば、半年行った子供たちの単位はどうするのかといった問題もあると思いますので、そういう問題を含めて、少しグローバル化していくための仕組みづくりをして、東京都の都立高校は結構やる、必ず皆外国に行くよということ。そのことが、きちんと英語を勉強しようということや、外国のことを知ろうということにつながったり、あるいは外国に行って日本のことを説明するために、日本のことを勉強しなければいけないという動機付けになるようなものを、もう少し幅広く行ってみることを考えてほしいと思います。すぐに全面的に行うことは難しいかもしれませんが、再来年度予算も今年の夏ぐらいいまでは考えなければいけませんので、そういう問題について、事務方で少し検討していただければと思います。教育委員会でそれは必要がないということであれば別ですが、お願いできればと思います。

【委員長】 竹花委員にもお願いしたいのですが、この間も議論に出ましたように、企業が留学経験をあまり評価しないという事実です。これは大問題だと思っています。仮に高等学校で半年遅れたら、大学等でも恐らく採らないと思います。同友会の調査で、留学経験を評価するというのは大企業のうちの22パーセント位しかありませんでした。その辺から直していかないと、なかなか若者も乗ってこないと思います。

もう一つは、東京都の予算で何とかするという考えもありますが、やはり企業との

連携が重要だと思います。英国を見てもアメリカを見ても、国際化するために産学官が連携しています。東京都もそういった努力をするべきだと思います。いずれにしても、キャンペーンの必要がありますね。

【竹花委員】　そうですね。企業の側も、イノベーション力やグローバルズムを持った子供たちをと言っていますから、一緒になって行ったら良いと思います。行う方法もあるだろうと思います。

【委員長】　私は、そういう点で非常に危機感を持っています。

【竹花委員】　先日のニュージーランドの地震を見たら、そういうことを感じている若者たちがたくさんいて、何とか自分で力をつけなければいけないと思っている。お金は誰に出してもらっているのか分かりませんが、あれは富山県ですか、結構いらっしゃるでしょう。19歳ですから、皆高校を出てから行っているのです。日本の若者も捨てたものじゃないなと思ったのですが、そういう子供たちの気持ちをもっと強くし、バックアップするような仕掛けを、企業の話ももちろんであります、東京都で先鞭をつけて行ったらどうでしょうか。

【委員長】　今の財政状態からすれば、大きな資金を出すのはなかなか難しいと思いますが、やはり先鞭をつけることが大事だと思います。

【竹花委員】　先生をちょろちょろ外国に1年ぐらい出すよりも、子供に直接支援した方が早いように思いますから、そういった点も含めて少し検討していただければと思います。

【委員長】　それでは、非公開の審議に移ります。

(午前10時35分)